

小学校における「心が動く読書活動」の推進

高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース
三ツ橋 理恵

実習責任教員 藤井 伊佐子
実習指導教員 阿形 恒秀

キーワード：読書活動，心が動く，国語科授業，学校図書館，家庭・地域との連携

1 課題設定の理由

国や地方自治体，各種団体において，読書の重要性が示されており，以前より関心を抱いていた。また，小学生・中学生・高校生が読書について答えた調査結果にも注目をしていた。

これまでに，児童から「先生，何で本って読むの。」と何度か質問されたことがあった。読書の重要性を伝えたいと思い，読書数や時間を増やす声かけをしていたが，児童の心に響く答えや働きかけをしたかどうか不安になる。そこで，読書の重要性について深く学び，納得できる答えを探し，児童が実感として理解したり納得したりする手立てや工夫を明確にしたいという思いが強くなった。

河合(2014)*は、「一冊の本を読むと，単に何かを『知る』という以上の体験ができると思っている。一人の人に正面から接したような感じを受けるのだ。」と述べている。筆者も似た体験がある。小学生時の『トム・ソーヤーの冒険』，中学生時の『風の谷のナウシカ』，高校生時の『17歳の遺書』である。本に出てくる言葉に共感し，実感として理解し，著者や登場人物との対話から，思いや考えが広がったり深まったり，もっと読みたいという読書への興味・関心・意欲へとつながったことを覚えている。

本校における諸調査等においても，読書活動の改善に取り組むことが重要であるとの結果が出た。また，筆者が行った全校児童対象の読書

アンケートにおいても，本を読むことが好きかどうかの質問の回答とともに書かれた理由から発達段階に応じて，興味・関心・意欲や活動に配慮することが大事であることがわかった。

「意味がわからない言葉がある」と答えた児童には，意味や意図するところが明確になるよう手立てを講じる必要があると考えた。さらに，理解できた内容から様々な思いや考えが広がり，深まることも想像できた。そこで，児童が「好き・おもしろい・役に立つ」と思える読書活動を行い，本に手を伸ばす一助にしたいと思った。

児童が，読書の楽しさや重要性を実感として理解したり，納得したりする手立てや工夫等を深く学び，その有効性を明確にしたいと考え，本研究テーマを設定した。

2 目的と方法

本実践研究は，「心が動く」ことの内実を，「読書への関心・意欲を高めること」「語彙力を拡充すること」「思考を広げ・深めること」の3つの資質・能力と措定して，読書活動を展開することにより，児童の読書生活を改善したり豊かにしたりすることが目的である。

なお，この3つの資質・能力は，学習指導要領における育成すべき資質・能力の3つの柱である〔知識及び技能〕，〔思考力，判断力，表現力等〕，〔学びに向かう力，人間性等〕との対応も考慮している。加えて，発達段階に応じた系統的な指導にも配慮する。

3つの資質・能力を育成するために、「国語科の授業における取組」「学校図書館における取組」「家庭・地域との連携における取組」の3側面から様々な読書活動を工夫・展開する。

検証は、前述の3側面の取組におけるアンケートや児童の姿等を対象に行った。ただし、学校図書館や家庭・地域との連携における取組では「読書への関心・意欲を高めること」のみとした。

国語科の授業における取組における工夫は、以下の6種類とした。

- (1) 楽しい言語活動の設定では、発達段階に応じて、児童が「本や読書が好き・おもしろい・役立つ」等を実感できるように考えた。
- (2) 学習過程の工夫(モデル学習と発展学習)では、まず全体でモデルとなるような学習を行い、次に個別で、その力を活用した発展的な学習を行った。
- (3) 学習の手引きの作成・活用について、学習の手引きとは、学習の流れや書き出し文例記載のシートや学習に関わる教師作成物、板書、表情、声かけ等指導に関わること全てであるが、本研究では、学習の流れや書き出し文例記載のシートを意味する。
- (4) 他者との共有の場の設定では、自分の作品を友達や周囲の人と共有することで対話が生まれ、自分の思いや考えを深め、読書へのさらなる関心・意欲を高めようとした。
- (5) 学年文庫の充実等、多様な本の提示を行うことにより、読書のジャンルを広げ、思考の広がり・深まりにつなげようとした。
- (6) 異校種・異学年交流では、1年生は幼小連携に配慮し、他の学年では同学年に限らず異学年とも交流することで、本への関心・意欲が高まったり、新しい本の魅力を知ったりすることをねらった。

学校図書館における取組における工夫は、「もの・場所・人」において様々行った。

ものについて、「視覚化した学年読書目標数の設置」とは、自らが取り組む状況を見えるようにした実践である。「感想BOXの設置」とは、読書や学校図書館について思ったり感じたりしたこと等を用紙に書きBOXに入れる取組である。

「花や緑等の設置」とは、児童が学校図書館でほっと一息つけられるよう、季節の花や緑、ぬいぐるみを置き、憩いの空間を作ったことである。

場所について、「学年コーナー」とは、児童が調べ学習や発展学習をしやすいよう、各学年各学習内容に関連する本を学年ごとに集めたものである。「展示コーナー」とは、児童の生活動線に、行事や学習内容、興味があることに関する本を配架した取組である。「スイミーワールドコーナー」とは、読み聞かせに臨場感をもたせ、学校図書館を楽しい空間にすることで、足を運ぶきっかけ作りをした取組である。

人について、「図書委員との取組」とは、お話クイズや読み聞かせ等の支援をしたことである。「長い休み時間の取組」とは、休み時間に様々な読み聞かせをしたことである。「本の森作り」とは、児童が学校図書館の好きな本を紹介するために様々な色・形のカードを作り児童が書いたカードを掲示したことである。

家庭・地域との連携における取組において、「図書だより」で家庭へ啓発をした。また地域においては、読み聞かせボランティアが、気候のよい5月に教室横のテラスで読み聞かせを行った「テラスde読書」、前述した「学年コーナー」や「スイミーワールドコーナー」等、市立図書館とは「各学年各教科内容に合わせた関連図書の依頼」「教師が選べるテーマ別一覧表作成依頼」等の連携を図った。

3 研究の実際

国語科の授業の成果と課題について述べる。

第1学年の授業「本の読み聞かせ」において、認定こども園で育まれた読書への関心・意欲が小学校においてもなめらかに接続するよう配慮した。読み聞かせの後、早速、学校図書館で本を借りたり読んだりする姿が見られた。幼小連携を意識し、話題、対話、準備する本等を工夫することの有効性を実感した。

第2学年の授業「本のお話クイズ作り」においては、クイズを作るために正確に読む意欲が高まり、クイズの問題である間違いを作ろうと、より丁寧に、言葉や叙述を見つめようとする、つまり、読書に対する意識をより高めることにつながったことがうかがえた。また、友達とクイズを出し合う中で、友達を選んだ本の中の時間、場所、人物、出来事等を正確に読もうとしていた。言語活動としての問答やお話クイズ作りの可能性を実感した。

第3学年の授業「本のつながりカード作り」において、「あぜ道」という言葉に関心をもった3B児(第3学年B児を意味する。以下同様)は、辞典や図鑑で意味を調べたものの十分納得していないようであった。しかし、友達や筆者とさらに対話を続ける中で、自分の知識や体験と結びつけて考え、実感として「あぜ道」という言葉を理解した。一つの言葉の意味について、多面的に考えるような学習課題の有効性が確認できた。

第4学年の授業「本の紹介カード作り」において、4D児は、最初の「かげ」の紹介カード作りに戸惑っていた。そこで何をどのように書くのか全体で学習し、学習の手引き等を頼りに先の学習でつけた力を活用し、友達に紹介したい本のカードを作成するよう支援した。カードに関心をもった児童は、友達が作成したカードを

見て、普段は選ばないような本を読み、読書のジャンルを広げていた。学んだ力を活用する場を設ける学習過程が有効な手立てとなった。

第5学年の授業「本の帯作り」において、宮大工の白鷹氏の考え方・生き方が書かれた文章を読んだ5B児は、その内容と自分の考え方・生き方と重ね、本の帯を書くことに戸惑っていた。そこで、幾つかの帯を提示し分類整理することにより、多様な表現の仕方があることに気づかせると同時に、書き方も示した。そのことにより、根拠や理由を明確にして自分の考えを帯に表すことができた。考える内容や書き方等を記した学習の手引きの有効性が確認できた。

第6学年の授業「本のポスター作り」において、児童は「森へ」を用い全体で(モデル)学習し、著者である星野道夫氏のメッセージについて考えた。その後の発展学習では、6D児は一番心に残っていた『100万回生きたねこ』を取り上げ、先の学習で得た知識や技能を活用してポスターを作った。そして、その本のメッセージを踏まえながら、その本は自分にとり、どのような存在なのかを考え、ポスターに表現することができた。著者からのメッセージを考えることは難しいことであったが、活動中に友達と各自のポスターを介して対話することにより、考えを整理し表現することができた。他者との共有の場を設定することの必要性を実感した。

学校図書館や家庭・地域との連携における取組の成果と課題の一例を挙げる。「スイミーワールドコーナー」では、本番にALTが英語版の『スイミー』を、筆者が日本語版の大型絵本を読み聞かせた。また、お話ボランティアが楽器演奏で効果音を、JTEがBGMを担当した。児童の感想からは、本の世界を満喫し、物語を読み味わうことを体感したようであった。筆者た

ちの準備する姿を見て、自ら進んで手伝いをする児童も多くおり「楽しかったあ!」「みんなで図書室のかざりを作って、本番にみんなよろこんでくれて、うれしかったです。またしたいです。」等の感想が見られた。このイベントをきっかけに、学校図書館に来て本を読んだり借りたりする児童の姿が増えた。読書環境の重要性や効果を確認できた取組であった。

「本の森の取組」は、児童が学校図書館の本を紹介する取組である。児童が、好き・紹介したい等と思った学校図書館の本について、題名・著者名・一言感想を手のひらサイズのカードに書き、学校図書館に掲示した。そして、図書委員と協力し合い、「本の森賞」と題した手作りの賞状を授与した。児童の中には、何冊も本を読み、何枚もカードを書いている姿も見られた。読書に関わる活動を他者と共有する中で行うことの有効性を確認できた実践であった。

4 成果と課題

(1) アンケートの結果

全校児童を対象にした読書アンケートから、全体として読書がより好きになっているという結果が確認できた。日頃の担任による取組等、本研究以外の要因も多々あると思うが、研究の実際で挙げた各実践の児童や教師の反応を踏まえると、本研究における実践も一因となっていると考える。

(2) 児童の姿

国語科授業、学校図書館、家庭・地域との連携における取組において、読書への関心・意欲が高まったあられの一例として、児童が本をよく借りるようになった、様々な本を読むことで知識を得て理解が深まった、読書で自分の思いや考えを深めた、友達や教師や周囲の人と共有する喜びを得た、本について友達や教師や家

族と対話したり、家庭でも本を読むようになったりした等の姿が確認された。

国語科授業においては、発達に応じた「楽しい言語活動の設定」、モデル学習から発展学習といった「学習過程の工夫」、表現に必要な言葉や文の例示や言語環境の整備にもつながる「学習の手引きの作成・活用」、作成した表現物の共有はもとより自分の知らなかった本との出会い、自分が持たなかった思いや考えとの出会いを意図した「他者との共有の場の設定」、学習の複線化を実現し友達や教師と話すきっかけを増やした「学年文庫の充実等、多様な本の提示」、幼小連携や上学年児童による下学年児童への読み聞かせ等の「異校種・異学年交流」等の取組の有効性を実感できたと考えている。

(3) 研究後の児童の姿

学級担任をはじめとする同僚の教職員から、読書への関心・意欲が高まり、それが継続され、読書を楽しんでいる様子や読書の生活化に近づいている児童の姿が確認できた。

(4) 今後の課題

児童の発達段階や国語力等の実態に応じて、興味・関心・意欲を高められるような本等を準備すること、言語活動や学習課題に配慮することが大事だと考える。また、児童や教師の負担は軽いが継続できる啓発活動、学校図書館における楽しい取組の充実を考え、仕組みを作ることも必要となってくるだろう。本研究は、児童の心を大切にしたいものの、筆者からの発信が多くなったが、今後は、より児童主体の読書活動や自発的な取組を支援していくことも大切だと考える。そして、児童が「本っていいな」「好き・おもしろい・役に立つ・もっと読みたい」と実感できる読書活動をめざしたい。

*河合隼雄(2014)『こころの読書教室』新潮社